

# チョムスキーは略奪者か

中 井 悟

## I

戦争が起これば必ず勝者と敗者ができる。そして勝者は敗者の財産を略奪することが多い。学問の世界でも同様である。二つの理論の間で対立・抗争があれば、いずれ、一方が勝ち、敗れた方の理論を自分の理論の中に取り込んでしまう。生成文法の歴史の中でもこういう戦争があったのである。

1957年の *Syntactic Structures*<sup>1</sup> の出版でデビューした生成文法は1965年の *Aspects of the Theory of Syntax*<sup>2</sup> で標準理論と呼ばれる (*Aspects-model* とも呼ばれる) 一応のまとまった理論となったが、この標準理論に対する修正・対立意見として George Lakoff, James D. McCawley, Paul M. Postal, John Robert Ross らによって生成意味論 (Generative Semantics) が提唱された。この生成意味論と Chomsky らの解釈意味論の対立・抗争は、生成文法の歴史の中で最大の理論闘争であるが、最終的には Chomsky らの解釈意味論派の勝利となり、生成意味論は敗退した。そしてその後、Chomsky の理論は、Principles-and-Parameters Approach (Government-Binding Theory (略して GB 理論) とも呼ばれる) となり、さらに最近では、Minimalist Program と呼ばれる理論に変わりつつある。<sup>3</sup>

この生成文法の変遷そのものに関しては、Newmeyer の *Linguistic Theory in America*<sup>4</sup> が取り扱っているが、最近、生成文法の歴史を扱った興味ある本が出版された。Randy Allen Harris の *The Linguistics Wars*<sup>5</sup> という本で

ある。これは、Chomsky と構造主義言語学や生成意味論派との間の抗争を内幕暴露的に扱っている本である。学会での Chomsky と反対派とのやりとりや MIT のクラスにおける Chomsky と Lakoff とのやりとりなどが描かれている。

本稿は、Harris がその本の中の、“The Legacy of Generative Semantics 2: The Right of Salvage”<sup>6</sup> という短い一セクションで取り上げている話題—Chomsky が、自分が攻撃し、敗退させた生成意味論を自分の理論の中に「こっそり」と取り込んでいる（生成意味論者に言わせれば、盗んでいる）ということ—を議論し、私なりの意見を述べようとするものである。

## II

まず、過去に Chomsky によって批判されているながら、現在の Principles-and-Parameters Approach に取り入れられている考え方のいくつかを紹介しよう。

### 1. Greenberg の universals と head-parameter

Greenberg の “Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements”<sup>7</sup> は言語の普遍性を議論する際に必ず引き合いに出される論文であるが、Greenberg は、その中で言語を S (Subject), O (Object), V (Verb) の並べ方により、

Type I: VSO型

Type II: SVO型

Type III: SOV型

の三つに分類し、それぞれの型は一連の関連した特徴を持っているとしている。例えば、Type I の VSO 型の言語では、前置詞が使用され、形容詞は

名詞の後に位置し、比較構文は Adjective-Marker-Standard であり、Type III の SOV 型の言語では、後置詞が使用され、形容詞は名詞の前に位置し、比較構文は Standard-Marker-Adjective といったぐあいである。<sup>8</sup>

『現代英語学要説』の第十五章「日英語の対照研究」<sup>9</sup>でも指摘しておいたが、Type I と Type II が VO 型言語として一つにまとめられるとすれば (Type III は OV 型である)、Greenberg の universals は、OV 型の言語と VO 型の言語の特徴として、次のようにまとめられる。

<u>OV 言語</u>	<u>VO 言語</u>
名詞 + 後置詞 (助詞)	前置詞 + 名詞
本動詞 + 助動詞	助動詞 + 本動詞
副詞 + 動詞	動詞 + 副詞
関係節 + 名詞	名詞 + 関係節
形容詞 + 名詞	名詞 + 形容詞
指示詞 + 名詞	名詞 + 指示詞
数詞 + 名詞	名詞 + 数詞
固有名詞 + 普通名詞	普通名詞 + 固有名詞
所有格 + 名詞	名詞 + 所有格 <sup>10</sup>

Greenberg の universals が示唆していることは、ある言語の基本語順がわかれば、その言語では前置詞が使用されるのか後置詞が使用されるのか、形容詞は名詞の前にくるのか後にくるのか、比較構文は Adjective-Marker-Standard なのか Standard-Marker-Adjective なのかなどの他の特徴が自動的にわかるということである。

一方、Principles-and-Parameters Approach では、Universal Grammar のパラメーターの一つとして head の位置を決めるパラメーターを仮定している。ある言語で、head-initial というふうにパラメーターが設定されれば、

その言語では、head-complement という語順になり、その結果、自動的に、動詞 (head) — 目的語 (complement), 前置詞 (head) — 目的語 (complement) の語順となる。もし、head-final というふうパラメーターが設定されれば、その言語では、complement-head という語順になり、その結果、自動的に、目的語 (complement) — 動詞 (head), 目的語 (complement) — 後置詞 (head) という語順となる。

Principles-and-Parameters Approach の head-initial か head-final かというパラメーターが、Greenberg の基本語順と同じ働きをしていることは明白である。このパラメーターは、明らかに Greenberg の VSO 型と SOV 型 (あるいは VO 型と OV 型) の言語の分類に対応したものになっている。Chomsky は、かつては、Greenberg の universals のことを “statistical tendencies”<sup>11</sup> としか評価していなかったが、いつのまにか自分の理論の中で重要な概念として使用しているのである。<sup>12</sup>

## 2. Fillmore の Case Grammar と $\theta$ -Theory

Case Grammar とは、名詞句はすべて格 (動作者とか動作の対象とかいう役割のことで、伝統的な形態的なものではない) を持っており、その格表示を深層構造に取り入れていこうとする文法である。例えば、次の a から e の文で、

- a. The door opened.
- b. John opened the door.
- c. The wind opened the door.
- d. John opened the door with a chisel.
- e. The door was opened by John with a chisel.<sup>13</sup>

John という名詞は、主語 (b と d) となったり、前置詞の目的語 (e) になった

りし、doorという名詞は、主語(aとe)となったり、目的語(bとcとd)となったりする。しかし、これらの名詞の格は一貫して同じである。つまり、Johnは動作者であり、doorは動作の対象である。chiselは道具である。そして、動詞は、lexiconでは、どのような格をとるかを示すframe featureを持っていることになる。例えば、openという動詞は

+ [ \_\_\_\_\_ O (I) (A) ]

というframe featureを持つ。これは、openという動詞は、

[ \_\_\_\_\_ O ]

[ \_\_\_\_\_ O + A ]

[ \_\_\_\_\_ O + I ]

[ \_\_\_\_\_ O + I + A ]

という case frame に挿入されることを示している。<sup>14</sup>

Principles-and-Parameters Approachで、Case Grammarにおける動詞のframe featureに対応するのは、動詞の argument structure(あるいは  $\theta$ -grid)である。argument structure (項構造)とは、

ある述語 (predicate) が、その語彙特性として項 (argument) をいくつ必要とし、また、それぞれの項がどのような主題役 ( $\theta$ -role) を担うかを、語彙目録 (lexicon) で指定したもの。例えば、動詞 put は、主題役動作主 (agent) を担う項を外項 (external argument) (主語となる項) として選択し、また主題 (theme)、場所 (location) を担う二つの項を内項 (internal argument) (補部 (complement) となる項) として選択する。したがって、put は次のような項構造を持つ。(下線は外

項を示す。)

put: [Agent, Theme, Location]<sup>15</sup>

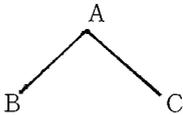
このように、Fillmore の Case Grammar が Principles-and-Parameters Approach に  $\theta$ -Theory として取り込まれているのは、明白である。<sup>16</sup>

### 3. Node Admissibility Condition と X-bar Theory

node admissibility condition というのは、ある句が適格な構造をしているかどうかをチェックする条件で、これは、McCawley の提唱した考え方である。McCawley は、node admissibility condition を次のように説明している。

the notion of 'derivation' is dispensed with entirely: the base component is a set of *node admissibility conditions*, for example, the condition that a node is admissible if it is labeled *A* and directly dominates two nodes, the first labeled *B* and the second labeled *C*<sup>17</sup>

つまり、標準理論では、base component の役割は、例えば、 $A \rightarrow BC$  という書き換え規則で、

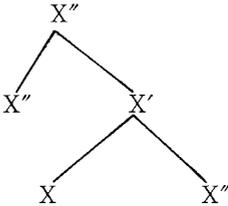


という枝分かれ図を生成することであるが、McCawley の考えでは、生成意味論では、この枝分かれ図がどのような方法で生成されるかは問題ではなく、base component の役割は、この枝分かれ図が許される枝分かれ図の形をしているかどうかをチェックするだけであるということである。

一方, Principles-and-Parameters Approach の X-bar scheme も, ある句構造が適格かどうかをチェックする適格性条件 (well-formedness condition) である。X-bar scheme は,

$$\begin{array}{l} X'' \rightarrow X''^* \quad X' \\ X' \rightarrow X \quad X''^* \end{array}$$

という規則で表されるが, 要するに, ある句構造が,



という形になっているかどうかをチェックする役割を持っているにすぎない。

Peter Sells の説明を借りる。

These X'-structures (partly) characterize well-formedness at d-structure. GB, in another departure from classical TG, has few or no phrase-structure rules, just the X' template. The idea is that any structure can be built out of any categories, but only those conforming to (7) [X-bar scheme] will be well-formed; so if for instance, an A heads an NP, that will simply be ruled out at d-structure (or ruled out 'in the base'). Phrase structures, like entire constructions, are viewed as arising out of complex interactions of different principles, and are not assumed to be generated in any traditional way (i. e., by a set of rewriting rules as illustrated in Chap. I). (In fact, it is not even

clear if GB is a 'generative grammar' any more, but I will not dwell on this issue.)<sup>18</sup>

Margaret J. Speas も次のように述べている。

McCawley proposed a theory of phrase structure in which dominance and precedence relations were expressed separately, and a set of 'node admissibility conditions' which constrain the well-formedness of phrase markers. This is essentially the position adopted by Stowell (1981) and Travis (1984), and generally accepted within the GB framework, in which there is no single rule or principle which both defines hierarchical structure and determines linear order.<sup>19</sup>

Principles-and-Parameters Approach の X-bar Theory というのは、まさに生成意味論の node admissibility condition の考え方を取り入れたものであると言わざるを得ない。

#### 4. Global Derivational Constraint と Trace Theory

global derivational constraint (全体的派生制約) に関しては、生成意味論者がいろいろ提案しているので、各説が要約されている『新英語学辞典』の説明を借りることにする。

Lakoff (1970c) は全体的派生制約を必要とするものとして、古代ギリシア語および英語に関する七つの言語事実を挙げているが、その中の一つは H. V. King (1970b) の観察に基づく、助動詞の短縮に関するものである。すなわち、次の例に示すように、英語の助動詞はある規則によって無強勢化されると、それがさらに短縮されるという、一般的な規則がある。

(2) a. There's this much wine in the bottle.

(びんの中にはこれだけのワインがある)

- b. Harry's on the job in the afternoon.  
 (ハリーは午後に仕事がある)

ところが、助動詞の直後にある構成素が変形規則の適用により削除されたり、あるいは、元の位置から同文中の別の位置に移動されたりした場合には、次の例に見られるように、助動詞の無強勢化は行われ(ず、従って、短縮も行われ)ない。

- (3) a. I wonder how much wine there is/\*'s in the bottle.  
 (びんの中にどのくらいワインがあるのだろう)  
 b. Sam's on the job in the mornings and Harry is/\*'s in the afternoons.  
 (サムは午前中に仕事があり、ハリーは午後に仕事がある)

すなわち、(3a) および (3b) において、それぞれ there is および Harry is の直後の位置にもともとあった構成素が変形規則の適用により、移動あるいは削除されたので、音韻規則の無強勢化規則（および短縮変形）がその後に適用できなくなると考えることができる。従って、このような無強勢化の規則を正しく記述するためには、単にそれが適用される段階の構造だけでなく、それ以前の、問題になっている移動変形あるいは削除変形が適用される段階の構造にも言及することが必要になる。<sup>20</sup>

Principles-and-Parameters Approach の Trace Theory が、この global derivational constraint を取り込んだものであることは、次の Chomsky の痕跡(trace) の説明を読むと明らかである。

Principles-and-Parameters Approach では、Move  $\alpha$  という移動規則によってある要素が移動された後に痕跡が残されると仮定する。

What<sub>i</sub> do you want to buy t<sub>i</sub>?

上の例では、whatが文頭に移動した後に痕跡tが残されている。

Chomskyによると、この痕跡tが短縮 (contraction) の適用を阻止する働きをする。<sup>21</sup> 次の例文 a は who が visit の目的語である場合 (b) と、want の目的語である場合 (c) の2通りの解釈が可能である。

- a. who do you want to visit?
- b. for which person *x* do you want to visit *x*?
- c. for which person *x* do you want *x* to visit?

ところが、次の例文 d は b の解釈しか許さない。

- d. who do you wanna to visit?

who が文頭に移動した後に痕跡を残すと仮定すると、who が visit の目的語である場合 ((b) の解釈) の S-structure は e のようであり、who が want の目的語である場合 ((c) の解釈) の S-structure は f のようになる。

- e. who do you want to visit t?
- f. who do you want t to visit?

want + to は短縮されて wanna という形になるのであるが、f では、want と to の間にある痕跡 t が want + to → wanna という短縮を阻止するのである。従って、d は b の解釈しか許さないのである。

ある規則が適用される時に、以前の派生の段階を参照して、その結果、その規則の適用が阻止されるという global derivational constraint と、以前に適用された規則のためにその痕跡が残っていて、それがある規則の適用を阻止するというのは、同じことである。Principles-and-Parameters Approach

の Trace Theory は、Lakoff らの提唱した global derivational constraint を取り入れたものであると言わざるを得ない。

この Trace Theory が生成意味論の global derivational constraint に起源をもつことは、Harris によっても指摘されている。

Trace theory can quite safely be called Chomsky's; it bears his indelible stamp. But it has immediate roots in work by Postal (1970), by Baker and Brame (1972), and by Selkirk (1972). The *want-to/wanna* data was first noticed by Lakoff, in the paper that launched global rules, and used as one of the justifications for such rules (1970b).<sup>22</sup>

このように、Principles-and-Parameters Approach の主要な考え方が、Chomsky が批判・攻撃していた理論から取り込まれたものであることは明らかである。<sup>23</sup>

### III

Chomsky に反対して生成意味論を提唱したのに、論争には負けるし、さらにいつのまにか自分たちの理論をかってに使われたのでは、生成意味論者も憤慨するであろう。Harris は、敗退した生成意味論を難破船にたとえ、海に投げ出された積み荷（つまり、生成意味論の理論やデータなど）の多くが Chomsky の GB 理論に拾われ（salvage され）、利用されたと述べている。Harris によれば、生成意味論者は、自分たちの成果が盗まれたと考えているとのことである。

With the wreck of HMS *Generative Semantics*, huge amounts of ideas, data, mechanisms, and perspectives were cast to the seas. Some of it was lost, probably for good, probably, in fact, for the best. But much else made its way into the holds of other theories; most notoriously, into the closely guarded hold of Chomsky's commissioned frigate, the *Government and Binding*. This fate is one of the two tragedies that ex-

generative semanticists recurrently cite as having befallen their model, that their work has been *stolen*. (強調は筆者のもの)<sup>24</sup>

Harris も引用しているが、生成文法の歴史を書いた Newmeyer も、生成意味論が Chomsky の後の理論に取り込まれていると述べている。

While generative semantics no longer is regarded as a viable model of grammar, there are innumerable ways in which it left its mark on its successors. Most importantly, its view that sentences must at one level have a representation in a formalism isomorphic to that of symbolic logic is now widely accepted by interpretivists, and in particular by Chomsky. It was generative semanticists who first undertook an intensive investigation of syntactic phenomena that defied formalization by means of transformational rules as they were then understood. This led to the plethora of mechanisms, such as indexing devices, traces, and filters that are now part of the interpretivists' theoretical store. Even the idea of lexical decomposition, for which generative semanticists were much scorned, has turned up in the semantic theories of several interpretativists. Furthermore, many proposals originally mooted by generative semanticists, such as the nonexistence of extrinsic rule ordering, postcyclic lexical insertion, and treating anaphoric pronouns as bound variables, have since appeared in the interpretivist [*sic*] literature, *virtually always without acknowledgment*. (強調は筆者のもの)<sup>25</sup>

“virtually always without acknowledgment”とは言っているが、Newmeyer は、彼の *Linguistic Theory in America* という本の記述全体がそうであるように、比較的客観的に事実だけを述べている。しかし、Harris は、対立する理論を断りなしに自分の理論の中に取り込んでしまう、Chomsky のこのような態度を “cavalier” と呼び、そのような態度は Chomsky の弟子たちにも受け継がれていると言っている。

Chomsky's attitude to intellectual property is cavalier at best—his own as well as others'—and it is an attitude that rubs off very quickly on his students; sometimes, even on the students of his students. Their own work, and each other's work, is all that matters. No one else gets too much attention, let alone discussion and acknowledgment. The most notorious example of this slighting is Chomsky's adoption of logical form, which occupies a critical place in his current model (that is, LF). As far as Chomsky appears to be concerned, logical form comes from Robert May, who, not coincidentally, completed a thesis under Chomsky exploring these ideas (later revising it substantially for publication—May, 1977; 1985). May cites Lakoff only once, very briefly, to deny that there is any connection between their respective suggestions (1985: 158n4), and he doesn't even mention McCawley at all, despite the central role played in his work by his rule of Quantifier-lowering—with minor wrinkles, essentially the same rule that McCawley proposed much earlier (1976b [1972]: 294). Next on the list of notorious borrowings is lexical decomposition, which also started to show up in interpretivist work in the mid-to-late-seventies; then comes a host of small developments, like the global properties of the trace convention and the main-verb analysis of auxiliaries.<sup>26</sup>

さらに続けて、Harris は、かつては非難していた理論を今度は擁護する Chomsky の奇妙な態度を指摘している。すなわち、Chomsky にとって、同じ理論でも、生成意味論者が主張していた時は、非難の対象であるが、それが自分たちの理論に取り込まれてしまえば、今度は、その理論は、擁護すべきすぐれた理論になってしまっているということである。

The interesting issue is that he [Chomsky] denounced generative semantics so warmly for many of the tendencies and mechanisms he now embraces equally warmly, a denunciation—curiouser and curiouser—he still maintains. Consider a recent development in his

framework, Mark Baker's Universal Theta Assignment Hypothesis, which ensures that semantic roles are assigned in a uniform way at D(EEP) -structure (Baker, 1988: 46ff). As Chomsky notes, Baker's proposal is similar to one "explored within generative semantics"; namely, "that deep structures represent semantic structure quite broadly, perhaps cross-linguistically." The earlier proposal, however, the Universal Base Hypothesis, "proved unfeasible, in fact, more or less vacuous" because of various problems with generative semantics having to do with its vast descriptive latitude. Now, with the tremendous restrictiveness built into government-and-binding theory, the same proposal "becomes meaningful, in fact extremely strong" (1988b: 66-67). Presumably he has similar notions about lexical decomposition and Predicate-raising—the former of which had "little empirical content," the latter of which was "quite unnecessary," at the Texas Goals conference (Chomsky, 1972b [1969]: 142-43)—now that his model has mutated in ways that accommodate them.<sup>27</sup>

このような Chomsky のやり方に対する生成意味論者の憤りの例として、Harris は Postal の見解を紹介している。

... suppose some proponent, like McCawley, of the unquestionably wrong and stupid Basic Semantics (BS) movement has, accidentally, hit on one or two ideas you need to use, say, hypothetically, the notion that surface quantifiers are connected to logic-like representations by transformational movement operations sensitive to syntactic constraints, or something like that.

When adopting this idea, assuming that you wish to do so, it would be an obvious rhetorical error to cite any proponents of BS. Not only would this waste a lot of serious linguists' time if they were persuaded to actually read such misguided stuff, it might mislead less sophisticated thinkers than you into thinking something about BS was *right*.

So the correct procedure is to proclaim and get others to proclaim,

over a long period, many times, that BS is totally wrong, misguided, unscientific, etc. Then, quietly, simply use whatever BS ideas you want without warning and without any tiring citational or attributional material. A well-known principle of scholarly law known as Right of Salvage guarantees that you cannot be held accountable for this. This principle determines that one need not make attributions to theoretical traditions already “generally established as stupid and not part of rational inquiry . . .”<sup>28</sup>

Harris は、Chomsky は、誰が何を先に主張したかといった問題を重要視していないと判断している。こういうことが問題になるのは、言語学がまだ十分に発達していないからだ、Chomsky は考えていると言うのである。

Predictably, Chomsky has a low opinion of squabbles about priority, which he believes are a feature of linguistics only because it is not yet a fully developed science, like physics:

There’s a kind of paranoia [in “underdeveloped fields” like linguistics]. For example, [the concern for priority] is the kind of infantilism that you get in semi-existent fields. The fact of the matter is that in any real field, people are going to be thinking about the same kinds of things at about the same time, because those are the problems that are on the agenda. If you want to worry about looking and seeing if this guy said it three months before I said it, that’s just childishness.<sup>29</sup>

Harris は、Chomsky のこのような考え方を、当然、間違っていると言う。

Chomsky is wrong, of course, that priority squabbles are unscientific. They are such an endemic feature of established sciences like physics that scientists often go to court about who said what when—for example, in the current patent fights surrounding gene splicing or superconductivity—and Watson’s famous *The Double Helix* (1968) is almost

entirely about the race for the trappings that go with being first. Even the desperately sincere Darwin, who flagellated himself constantly about his concerns over the paternity of natural selection, wrote Lyell and Hooker to press for their aid in establishing his priority (Darwin, 1958 [1892]: 196-98). But ideas don't require the potential to reap huge industrial profits or Nobel prizes or places in history to inspire protectiveness, even paranoia. Ideas are the stock-in-trade of science, and very few scientists appreciate it when the credit for them goes elsewhere.

Chomsky—who, it should be clear, is not the common-thief variety of idea-absorber; he genuinely is cavalier about intellectual property, as happy to give ideas away as he is to appropriate them—has to expect some flack for his virtually total disregard of some people's contributions, particularly when he can be quite careful to acknowledge the contributions of other people, those a little closer to his theoretical heart.<sup>30</sup>

#### IV

Harris は、Chomsky が断りなしに生成意味論の主張を自分の理論の中に取り込んでいることに対して批判的であるが、対立する理論を自分の理論の中に取り込むこと自体は非難されることではなく、科学の世界では普通に行われていることであると言っている。

On a more general note, salvaging is a widely established practice in science. When two programs clash the victorious one frequently, and often covertly, incorporates solutions, data, and methods from the defeated one. Even in relatively uncontentious circumstances, proposals are up for grabs in science. See Pullum (1991 [1983]: 14), for instance, on the rapid coopting of material from relational grammar in the seventies.<sup>31</sup>



$\theta$ -Theory は,  $\theta$ -role や argument structure を使い, 新たな展開をしている。 $\theta$ -Criterion という原理がそのよい例である。 $\theta$ -Criterion とは,

Each argument bears one and only one  $\theta$ -role, and each  $\theta$ -role is assigned to one and only one argument.<sup>32</sup>

というものである。

この  $\theta$ -Criterion は, Principles-and-Parameters Approach ではきわめて重要な役割を果たしているのである。例えば,  $\theta$ -Criterion から, かつて主張された主語繰り上げ変形 (Subject-to-Object Raising) は存在しないことが証明されるのである。すなわち,

John believes Bill to have killed Mary.

という文で, Bill を埋め込み文から取り出し, 主文の目的語にするという変形は存在しないということである。

John believes Bill [\_\_\_\_\_ to have killed Mary]  
 ↑ \_\_\_\_\_

その理由は, もし, 主語繰り上げ変形が存在すれば, Bill という argument は二つの  $\theta$ -role をもらうことになり,  $\theta$ -Criterion に違反することになるということである。まず, Bill は, 埋め込み文の中で, 動詞 kill から Agent という  $\theta$ -role を与えられる。

John believes [Bill to have killed Mary]  
 ↑ \_\_\_\_\_  
 $\theta$ -role

次に, Bill を主語繰り上げ変形で埋め込み文から取り出し, 主文の目的語にすると, Bill は, 今度は, 主文の動詞 believe から新たな  $\theta$ -role を与えられる。

John believes Bill [\_\_\_\_\_ to have killed Mary]



結局, Bill は二つの  $\theta$ -role を与えられることになる。これは, 一つの argument は一つの  $\theta$ -role しか持つてはいけないという  $\theta$ -Criterion の違反である。従って, 主語繰り上げ変形というものは, 想定してはいけないことになる。そしてさらにこの議論を一般化すれば, NP の移動は,  $\theta$ -role が与えられる  $\theta$ -position から  $\theta$ -role が与えられない  $\bar{\theta}$ -position への移動に限るということになる。

他のモジュールとの有機的関係という面からみれば, 例えば,  $\theta$ -role は government と組み合わされて  $\theta$ -government という考え方を生み出しており, この  $\theta$ -government がさらに proper government を規定するのに使われているといったぐあいである。さらに, この proper government は, Trace Theory と関係づけられ, Principles-and-Parameters Approach で重要な働きをする Empty Category Principle という原理の中で使われている。 $\theta$ -government, proper government, Empty Category Principle の定義を示すとこのことがよくわかるであろう。

Empty category principle: ECP

Traces must be properly governed.

A properly governs B iff A theta-governs B or A antecedent-governs B (cf. Chomsky, 1986b: 17)

A theta-governs B iff A governs B and A theta-marks B.

A antecedent-governs B iff A governs B and A is co-indexed with B.<sup>33</sup>

このように,  $\theta$ -Theory が Case Grammar から派生した理論であるとしても,  $\theta$ -Theory は, Principles-and-Parameters Approach に組み込まれ,

展開され、他のモジュールとも密接に関係し、Principles-and-Parameters Approach という理論体系の一部となっているのである。

生成意味論者は、Chomsky が自分たちのアイデアを盗んだと非難するが、Chomsky は生成意味論を salvage し、coopt し、自分の理論の中に incorporate したのである。生成意味論のアイデアをうまく活用し、自己の理論を豊かなものとしていったのである。<sup>34</sup>

Chomsky のこのやり方は、科学の発展の法則に合っているのである。すぐれた理論は、それ以前の理論をすべて包含しているのが常である。科学史をみてもよい。ニュートン力学はガリレオやケプラーの理論よりすぐれている。それはニュートン力学がガリレオやケプラーの理論を包含しているからである。つまり、ニュートン力学は、ガリレオやケプラーの理論が説明できることはすべて説明でき、しかも、ガリレオやケプラーの理論が説明できないことも説明できるということである。<sup>35</sup>

以上、Harris の記述を紹介しながら、Chomsky が生成意味論などの対立する理論を自己の理論の中に取り込み、自己の理論をより豊かで体系的なものにしてきたこと、そして、それは科学の発展の過程で当然行われることであることをみてきた。

最後に、生成意味論者を勇気づける言葉でもって本稿を終わることにしよう。—Principles-and-Parameters Approach に生成意味論の主張が取り込まれているということは、生成意味論は正しかったということである。戦いに負けはしたが、その理論には真実が含まれていたということである。—

#### 註

- 1 Noam Chomsky, *Syntactic Structures* (The Hague: Mouton, 1957).
- 2 Noam Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax* (Cambridge, Mass.: The M.I.T. Press, 1965).
- 3 Minimalist Program に関しては、Noam Chomsky, "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *MIT Occasional Papers in Linguistics*, No. 1 (1992) や外

池滋生・大石正章, 「最新チョムスキー理論の概要(1)~(5)」, 『英語青年』(1992年8月~12月)などを参照。なお, Noam Chomsky, “A Minimalist Program for Linguistic Theory” は, Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser (eds.), *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger* (Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1993), pp. 1-52に再録されている。

- 4 Frederick J. Newmeyer, *Linguistic Theory in America* (2nd ed.; Orland: Academic Press, Inc., 1986).
- 5 Randy Allen Harris, *The Linguistics Wars* (Oxford: Oxford University Press, 1993).
- 6 Randy Allen Harris, *The Linguistics Wars*, pp. 253-56.
- 7 Joseph H. Greenberg, “Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements,” *Universals of Language*, ed. Joseph H. Greenberg (2nd ed.; Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1963 and 1966), pp. 73-113.
- 8 Adjective-Marker-Standard という比較構文は次の英語の例で代表される。

John is smarter            than            Bill.  
    Adjective            Marker            Standard

Standard-Marker-Adjective という比較構文は次の日本語の例で代表される。

ジョンは ビル                            より                            かしこい。  
    Standard                            Marker                            Adjective

- 9 石黒昭博・中井悟・龍城正明・高坂京子, 『現代英語学要説』(東京:南雲堂, 1987), p. 312。また, 柴谷方良・影山太郎・田守育啓, 『言語の構造(意味・統語篇)―理論と分析―』(東京:くろしお出版, 1982), pp. 213-27 (特にpp. 219-20)を参照。
- 10 柴谷方良・影山太郎・田守育啓, 『言語の構造(意味・統語篇)―理論と分析―』, pp. 219-20.
- 11 Noam Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax*, p. 118.
- 12 この点は, 拙稿, 「科学史的観点からみた生成文法理論の変遷(II)」, 『同志社大学英語英文学研究』, No. 49 (1989), pp. 133-34でも指摘しておいた。
- 13 Charles J. Fillmore, “The Case for Case,” *Universals in Linguistic Theory*, eds. Emmon Bach and Robert T. Harms (New York: Holt, Rinehart and Win-

- ston, Inc., 1968), p. 27. ただし, eは除く。
- 14 Charles J. Fillmore, "The Case for Case," p. 27. A は Agentive, I は Instrumental, O は Objective の略である。
- 15 原口庄輔・中村捷(編), 『チョムスキー理論辞典』(東京:研究社出版, 1992), p. 35.
- 16 拙稿, 「科学史的観点からみた生成文法理論の変遷(II)」, pp. 126-27でも指摘しておいたように, この点に関しては, Newmeyer が *Linguistic Theory in America*, p. 106で次のように述べている。

Despite the lack of success of case grammar itself, most generative syntacticians would agree today that any adequate theory must include a characterization of semantic cases (or, as they are more commonly termed, "thematic roles") and relate them to other aspects of syntactic patterning. Indeed, in the current government-binding theory . . . , thematic roles are at the center of one of the subsystems of the theory. Fillmore and the case grammarians deserve credit for impressing upon the linguistic community the importance of these roles.

- 17 James D. McCawley, *Grammar and Meaning: Papers on Syntactic and Semantic Topics* (Tokyo: Taishukan, 1973), p. 39.
- 18 Peter Sells, *Lectures on Contemporary Syntactic Theories: An Introduction to Government-Binding Theory, Generalized Phrase Structure Grammar, and Lexical-Functional Grammar* (Stanford: Center for the Study of Language and Information, Stanford University, 1985), p. 31.
- 19 Margaret J. Speas, *Phrase Structure in Natural Language* (Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 1990), p. 19.
- 20 大塚高信・中島文雄(監修), 『新英語学辞典』(東京:研究社, 1982), pp. 310-11.
- 21 痕跡が want to の短縮を阻止するという説明に関しては, Noam Chomsky, *Rules and Representations* (New York: Columbia University Press, 1980), pp. 158-60を参照。
- 22 Randy Allen Harris, *The Linguistics Wars*, p. 294.
- 23 最近の Minimalist Program と呼ばれる Chomsky の理論では, lexical insertion が派生の途中でも許されている。生成意味論でも派生の途中の lexical insertion が行われていたが, この二つの lexical insertion は考え方が異なるので, 本稿では扱わないことにする。

また、Minimalist Program では、かつて廃棄された generalized transformation が復活して採用されている。名称は同じであるが、もちろん、その内容は異なっている。

- 24 Randy Allen Harris, *The Linguistics Wars*, p. 253.
- 25 Frederic J. Newmeyer, *Linguistic Theory in America*, p. 138. この箇所は拙稿, 「科学史的観点からみた生成文法理論の変遷(Ⅱ)」, pp. 127-28にも引用した。
- 26 Randy Allen Harris, *The Linguistics Wars*, p. 254.
- 27 Randy Allen Harris, *The Linguistics Wars*, pp. 254-55.
- 28 Paul M. Potal, "Topic . . . Comment: Advances in linguistic rhetoric," *Natural Language and Linguistic Theory*, Vol. 6, No. 1 (1988), p. 136. この箇所(最後の一行を除いて)が, Randy Allen Harris, *The Linguistics Wars*, p. 255に引用されている。
- 29 Randy Allen Harris, *The Linguistics Wars*, p. 255.
- 30 Randy Allen Harris, *The Linguistics Wars*, pp. 255-56.
- 31 Randy Allen Harris, *The Linguistics Wars*, pp. 307-308. この文章を注でしか書かなかったということが, Harris が Chomsky に対して批判的であることを示している。
- 32 Noam Chomsky, *Lectures on Government and Binding* (Dordrecht: Foris Publications, 1981), p. 36.
- 33 Liliane Haegeman, *Introduction to Government and Binding Theory* (Oxford: Blackwell, 1991), p. 404.
- 34 考えてみれば、生成意味論は他の理論に利用されやすかったのである。というのは、生成意味論は、個々の学者が特定の事項について断片的な理論を提唱しただけで、体系的な理論としてまとめられていなかったからである。個別的な提案がバラバラにされていたわけであるから、他の理論からすると、自分の理論の中に取り込みやすかったのである。
- 35 ニュートン力学がガリレオやケプラーの理論を包含していることについては、拙稿, 「科学史的観点からみた生成文法理論の変遷(Ⅰ)」, 『同志社大学英語英文学研究』, Nos. 47 & 48 (1989), pp. 202-34をごらんいただきたい。

**Synopsis**

## Is Chomsky a Plunderer?

Satoru Nakai

In developing his theory, Chomsky incorporated many ideas from his opponents' theories such as Greenberg's universals, Fillmore's Case Grammar, and Generative Semantics after he defeated them. Because he did not make any acknowledgment when he utilized their ideas, he is accused by generative semanticists of "stealing" their ideas.

But according to Randy Allen Harris, the incorporation of the loser's ideas into the winner's theory "is a widely established practice in science. When two programs clash the victorious one frequently, and often covertly, incorporates solutions, data, and methods from the defeated one."\* From this point of view, Chomsky is not to be blamed. He just followed this well-established practice.

From the point of view of the history of science, too, Chomsky is not to be accused. A superior theory, which comes later, incorporates preceding inferior theories. The superior theory can explain not only what the preceding inferior theories can explain but also what the preceding inferior theories cannot explain. Chomsky has incorporated and synthesized his opponents' theories into his own theory and developed the Government-Binding Theory, which is a tightly organized system of principles and parameters. He has clearly derived some of the principles and parameters from opponents' theories, which are combined with other principles and parameters and play an important role in the Government-Binding Theory, but since this has resulted in enriching his theory, he should be acknowledged as a faithful follower of the established practice in science. He has

done what any scientist would and should do to develop a scientific theory.

\*Randy Allen Harris, *The Linguistics Wars* (Oxford: Oxford University Press, 1993), pp. 307-308.